

別に検討した報告は少ない。本研究で骨転移症例の臨床病理学的特徴と予後について明らかにする。

【対象と方法】2000年1月から食道癌根治切除後に初発再発として骨転移をきたした11例を後方視的に検討した。

【結果】食道癌の病期はStage II 3例, Stage III 5例, Stage IV 3例で, 3例に壁内転移を認めた。7例が術後1年以内に再発し無病生存期間中央値は9.6か月であった。6例が単発, 5例が多発であり, 部位は脊椎が6例, 肋骨, 骨盤, その他が3例ずつであった。他臓器転移を同時性2例, 異時性7例に認めた。再発後治療は切除3例, 化学療法2例, 化学放射線療法, 放射線治療は1例ずつであった。再発後生存期間中央値は4.8か月, 1年生存率20.5%であり, 肺転移(同14.7か月・50.3%)と比較して有意に予後不良であった($p = 0.004$)。

【結語】食道癌根治切除後初発再発が骨転移の症例は治療抵抗性で予後不良である。

22 胃癌に対するTS-1を中心とした化学療法の当科の現状と今後の展開

矢島 和人・斉藤 敬太・神田 達夫
石川 卓・松木 淳*
大橋 学**・小杉 伸一・畠山 勝義
新潟大学院消化器・一般外科
県立がんセンター新潟病院外科*
がん・感染症センター都立駒込病院
胃外科**

【背景】TS-1は胃癌治療に中心的な役割を果たしている新規抗がん剤である。

【対象】2000年4月から2010年6月まで当科でTS-1を投与した胃癌101名(高度進行・再発68名, 術前7名, 補助化学療法25名, その他1名)。投与方法ごとの治療成績をretrospectiveに解析した。

【結果】高度進行・再発例では奏効率は41%で, 治療成功期間の中央値は182日で, 全生存期間の中央値は375日であった。2次治療は37名(62%)に行なわれパクリタキセル療法が最多31

名(46%)であった。13名がサルベーン切除対象となった。術後補助療法では1年以上投与の治療完遂例は17名(68%)であった。投与中の再発は2名, 投与完了後の再発は4名であった。

【結語】当科での高度進行・再発, 術後補助療法におけるTS-1投与の成績は過去の報告と一致する。今後は術前投与の予後に関する有効性のデータの蓄積が必要である。

23 高度進行胃癌に対する分割DCS療法の使用経験

佐藤 優・河内 保之・牧野 成人
矢田 佑子・黒崎 亮・川原聖佳子
西村 淳・新国 恵也

厚生連長岡中央総合病院外科

【背景】DOC, CDDP, S-1の3剤併用によるDCS療法は高い抗腫瘍効果を有し, 進行胃癌治療としての有用性が期待されている。当院でのDCS療法の経験からその効果と安全性について検討を行った。

【対象・方法】対象はT3, T4, bulky N2もしくはstage IV症例12例で, 毒性の軽減を期待し金沢大学レジメン(分割DCS療法)を採用した。

【結果】12例の進行度はStage IIIA 5例, IIIB 2例, IV 5例であった。NAC症例では原則的に2コース後に手術を施行した。G3/4の副作用は8例に認め, 好中球減少7例, 食欲不振1例, 口内炎1例(重複例あり)であった。2コース以上施行した症例8例での治療効果判定ではCR 1例, PR 6例, SD 1例であり奏効率は87.5%であった。手術を施行された6例のうち原発巣の組織学的効果判定はGrade 3 2例, Grade 2 3例, Grade 1 1例であった。

【結語】分割DCS療法は高率に好中球減少の副作用を認めるものの高い腫瘍効果が得られ, 高度進行胃癌に対する有用な治療法であることが示唆された。